



『振り返れば未来 農民作家 山下惣一聞き書き』

聞き手 佐藤 弘

不知火書房 刊 (TEL092-781-6962)

定価2,200円 (本体2,000円+税)

旧知の山下惣一さんが2022年7月に亡くなった。86歳だった。

1936年に佐賀県唐津市の農家の長男に生まれた山下さんは、明治生まれで軍隊帰りの頑固な父親に高校進学のを断られた。5代続く分家の復興に生涯を捧げた「株取り養子」の父親は、往時の農家の通念だった「教育は家をつぶす」という信念の持ち主だった。

読書や勉強に惹かれ、2度の家出を決行した山下さんが、玄界灘を望む傾斜地で1.3ha余の田畑を耕す家族農業を継いだのは、そうした村の現実から逃れようとしている自分に気づいたからだ。夕日を浴び、水滴を孕んで輝く稲穂の美しい光景や大自然の神秘にも心打たれた。

爾来、腰を据えて「ホンモノの百姓」になる「自己改造」に挑戦する。同世代の若者と村の因習にも挑んだ。折しも「近代化前夜」、間もなく農業・

農村は、この国の「高度経済成長」を支える「近代化」の怒涛に呑み込まれる。山下さんも「選択的規模拡大」の時流に乗ってミカンを導入し、新興産地づくりの先頭に立つが、過剰恐慌の渦に巻き込まれた。これに米の減反政策が追い打ちをかけた。村が大揺れに揺れ、家族農業がやがて雪崩を打って「絶滅危惧種」に追い込まれていく事態が進行する。

そんな時代への「怒り」が、山下さんを文筆・講演活動に駆り立てる。メディアに登場した山下さんの言動は、「近代化」や「自由化」を標榜して家族農業を圧殺する時流への反抗として注目された。舌鋒鋭いブラック・ジョークや奇想天外のユーモアを持ち味にした「山下リアリズム」は多数の著作の真骨頂だ。海外行脚の豊富な体験で説得力が増した。家族農業の価値や役割を求め、農民同士の越境にも力を注ぐ。「求道者」のようなその半生を朗らかに語り尽くした460ページ余の圧巻だ。

さんかいの げん
(山海野 玄)